

練馬、板橋のお富士さん……川越街道沿いの富士塚

板橋区、練馬区にも富士塚が残っている。板橋は中山道の宿場だが、そちらにはあまり残っておらず、川越藩のみが参勤交代に使っていた川越街道沿いの小さな宿場に残っているのはなぜだろうか。

今は板橋区、練馬区となっているが、練馬区は昭和22年8月に23番目の区として板橋から独立した。それまでは練馬大根で有名な畑作の農村部だった。今は都市化が進んでいるが、まだ農村の面影を残しており、富士塚が似合う感じがする地域である。歩いての富士塚めぐりは楽しい。

- 下練馬富士……旧川越街道沿いの富士嶽神社にある。
- ◆旧川越街道……石観音（吹上観音への分岐）。「どら焼き」老舗
- 大松富士……北町富士、本殿が焼失。大松氷川神社鳥居脇。
- ◆松月院、東京大仏……高島秋帆・砲術訓練。日本三大仏。
- 下赤塚富士……諏訪神社の附属地の浅間神社。大きいが熔岩は少ない。
- 上赤塚富士……氷川神社赤い鳥居の脇にある。富士講石碑多い。
- ◆乳房榎（三遊亭円朝の怪談噺）、くつが鳴る（清水かつら作詞）
- 白子富士……白子宿の熊野神社境内。別に熔岩で造った胎内くぐり。



みわ塾 講座 三輪主彦（みわかずひこ）

〒173-0023 板橋区大山町 33-6 090-9827-8340

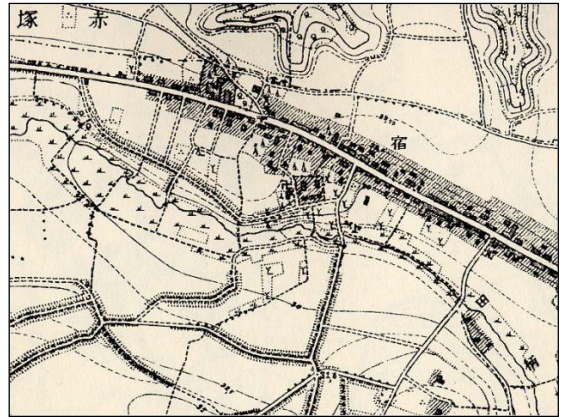
ホームページ <http://kazmiwa.web.infoseek.co.jp/>

下練馬富士 川越街道沿いのお富士さん

■川越街道 下練馬宿

我が家の近くの板橋宿平尾で中山道と川越道中（大山道）が分かれる。中山道は板橋宿だが川越街道は上板橋宿という。上板橋宿の次は下練馬宿へつながり、白子川をわたって埼玉県の白子宿に向かっている。中山道の宿場とは違って、参勤交代は川越藩だけなので宿場としては規模は小さかった。

東武東上線と川越街道はほぼ平行して川越に向かっており、本日の始発点、東武練馬駅は昔の下練馬宿にある。駅を出て旧川越街道をすこし上板橋にもどると聖観音の石造がある。なんとなく昔の道ばたのお地蔵さんみたいである。この分岐から今来た道の方に行くと吹上観音への参詣道になる。昔は荒川を渡って参詣する人も多かったが、今は少ない。



右上の地図は明治の地形図。追分けの場所がわかる。東武練馬駅はどのあたりかわかりますか。下は旧川越街道の説明文。

この道は、戦国時代の太田道灌が川越城と江戸城を築いたころ、二つの城を結ぶ重要な役割を果たす道でした。江戸時代には中山道板橋宿平尾の追分けで分かれる脇往還として栄えました。日本橋から川越城下まで「栗（九里）より（四里）うまい十三里」とうたわれ、川越藩の宣伝にも一役かいました。

下練馬宿は「川越道中ノ馬次ニシテ、上板橋村へ二十六丁、下白子村へ一里十丁、道幅五間、南へ折ルレバ相州大山へノ往来ナリ」とあります。川越寄りを上宿、江戸寄りを下宿、真ん中を中宿とよびました。上宿の石観音のところで徳丸から吹上観音への道が分かれています。

通行の大名は川越藩主のみで、とまることはありませんが、本陣と脇本陣、馬継の間屋場などがありました。旅の商人や富士大山詣で、秩父巡礼のための木賃宿もありました。浅間神社の富士山、大山不動尊の道標、石観音の石造物に昔の街道の面影を偲ぶことができます。

平成六年三月 練馬区教育委員会

■富士嶽神社（練馬区北町 2-41-2）

旧川越街道側の鳥居には富士嶽神社と看板がかかっているし、地図にもそう書いてあるのだが、中の鳥居脇の看板には浅間神社、祭神は木之花開耶姫命と書いてある。富士嶽神社と浅間神社は同じものと思われているようだ。しかし確かめていないので、今回何か確かめてみましょう。

■下練馬富士（練馬区北町 2-41-2）

鳥居をくぐると小さな広場になっている。ここでは7月1日の山開きには屋台店が出て賑わう。広場の奥、本殿の左手のコンクリート階段上に熔岩積みの富士山がある。途中には合目の石もあり、富士講の石碑も多い。ここは下練馬上宿、中宿の「丸吉講」の人たちが造った。

石碑を見ると明治前、1872年再築、1927年（修築。関東大震災で崩れたため）、1951年改築されたようだ。昭和二年六月

一日上宿中とある石碑、「（吉）同行三建記念碑」の裏側には「氏子総出場人員六百人、諸職人壱百五拾人」とある。この講の人数はかなり多かったようだ。

富士講はすでにないが、氏子の方々が手入れをしているので、きれいな富士塚に保たれている。



大松富士、練馬区北町には二つの富士山がある

■いま坂

川越街道を下練馬から赤塚方面に来るにはダラダラした坂を上る。いまはほとんど気が付かないが、バイパス道のあたりはかなりの谷なのだ。先ほどの下練馬富士の北側も大きな谷で、昔は線路越しに遠くまで眺めることができたはずだ。

今はビルに囲まれているが、富士塚はたいいてい谷から眺めたら、そそり立っているような場所に造られている。次ぎにいく氷川神社もちょっとした高台に有ることに注目して頂きたい。

ちょっと歩いたので、ちょっと一休み。現代風、茶店のつもりで。神馬屋（じんめ）でどら焼きでも食べましょうか。



■大松富士（練馬区北町 8-22-1）

どら焼きを食べて、川越街道に出て歩道橋を越え、南に100mほど下がると、氷川神社に出る。今ここには社殿がない。2006年の11月13日に火事で焼けてしまい、神様はまだ仮住まいになっている。氷川神社なので祭神はスサノオノミコトである。この神社は地元の名前をとって大松（おおまつ）の氷川さまといわれている。その境内にあ



る富士塚なので大松富士と呼ぶのがいいと、私は思うのだが、近隣の人に聞いても「お富士山だよ！」というだけ。地元の人はそのれでいいのだろうが、他地区の人にわかるようにした方がいいのだが。ある本には北町富士と表記されているが、私は「大松富士としましょうよ」と提案したい。

写真は石段右手の大松富士
鳥居の奥は在りし日の社殿



当社は「大松の氷川様」といわれてきました。大松とは下練馬村の小字の名です。

祭神は建速須佐之男命です。境内社に御獄神社（日本武尊）、富士神社（木之花開邪姫命）、稲荷神社（保食神）、白山神社（伊邪那美命）などがあります。

さらにこの神社の特徴として参道脇に富士塚があります。江戸時代中頃から、江戸を中心に盛行した、富士信仰の丸吉講によって築かれたものです。頂上の石宮は天保六年（1835）再建、塚中腹の御手洗石は同九年（1838）再建と刻まれていますから、それ以前の築造であることにちがひありません。ほかに明治・大正の富士登山記念碑などがあります。ちなみに、鈴原（すずがはら）神社の碑は富士山一合目にある同神社の登拝記念に建てたものです。これらの境内社は江戸時代より練馬近在の富士講・御獄講など民間信仰の中心であったことがうかがわれます。

昭和六十一年三月 練馬区教育委員会

■松月院（赤塚8-4-9）・鎌倉街道

東武東上線の下赤塚駅の踏切をわたり、松月院の方向に向かう。松月院は曹洞宗の寺で、板橋区内では最も由緒のはっきりしたお寺。康正2年（1456）赤塚城に移った千葉自胤（よりたね）が、地元の古寺であった宝持寺へ土地を寄進して、寺名を松月院と変えさせたと言われている。屋根に見える三個の月星紋は、千葉氏の紋所です。徳川家康が江戸に移り、赤塚城は廃城となったが、天正19年（1591）に、徳川氏も40石をこの寺に寄進し、以来御朱印寺として幕府の保護を受けた。

松月院が有名なのは高島秋帆の大砲演習、天保12年（1841）5月に松月院を本陣として山の下徳丸ヶ原で幕府の役人や大名が見守る中、荒川に向かって実弾射撃を行い、歩騎兵の訓練など西洋兵術の成果を披露し見学者を驚かせました。これが明治の新政府になって実を結んだ。ここが陸軍発祥の地、秋帆は「陸軍の父」だそうである。眼下の高島平は高島秋帆の名前をとったものである。

ところで、松月院に行く途中で鎌倉街道をわたる。このあたりは中世から開けており、いざ鎌倉への道があったのだが、それをたどるのはなかなか難しい。所どころに鎌倉古道の道しるべがある。

下赤塚富士、諏訪神社の付属地にある富士山

■東京大仏（板橋区赤塚 5-28）

松月院の裏側は下り坂になっている。坂を下りてみあげると乗蓮寺の石段が見える。このお寺はもともと我が家の近くの板橋宿中宿にあったのだが、高速道路用地になったために、昭和48年にこの地に移転し、52年には大仏さんを造った。高さ8.2m、青銅製で32トンの重さがある。（鎌倉大仏は高さ13.35m、重さ124トン）



板橋に住んだ世界的な探検家植村直己の墓がある。植村直己は昭和16年（1941）兵庫県日高町（現在は豊岡市）の生まれで、明治大学山岳部に入部以来世界5大陸最高峰登頂、犬ぞりによる北極圏の完全走破などに成功。昭和59年（1984）年にマッキンリー冬期単独登頂後に消息を絶った。墓石には詩人草野心平の追悼の詩が刻まれている。

■諏訪神社（板橋区大門 11-1）

荒川を望む高台上にある徳丸北野神社と赤塚の諏訪神社では、江戸時代から奇祭「田遊び」が行われる。田遊びは五穀豊穡を願う神事で、記録は比較的多く、古川古松軒の「四神地名録」や、「武蔵野話（むさしやわ）」「江戸名所図会」などに紹介されている。今はこの2社にのみ残り、国指定の重要無形民俗文化財になっている。

2月11日が徳丸北野神社、13日が赤塚諏訪神社で、夜7時ごろから盛大に行われる。その内容は「稲魂を喚起し、稲作の擬似形態を演じることで、豊穡を願う予祝神事」（小野寺節子『板橋の田遊び』、1997）であるそうだ。

今年はぜひ見てみたいと思っている。

ところで諏訪神社は、祭神は建御名方神（たけみなかた）。この神は大国主の子供であり、出雲の国譲りの時に、武甕槌命（たけみかずち）に逆らった反逆者だが、軍神として「鹿島、香取、諏訪の神」と称されて、全国に2500社も末社ができた。関東だけにおおきのではなく、長崎オクンチも長崎諏訪神社の行事である。

■下赤塚富士（板橋区大門 5 諏訪神社社地）

諏訪神社の鳥居前の歩道を渡って南に50mほど行くと、広場がある。この一角に高さは5mほどの小山がある。登り口には浅間神社の鳥居があり、頂上には祠がある。大きな塚だが、富士塚特有の熔岩ははり付けていない。今は樹木が覆っているが、もとは古墳だったのではないか。もともと赤塚という地名からして古墳や塚は多かったはずだ。



石碑は多く、丸吉講のものが多い。また御室浅間神社、小御岳神社の石碑もある。しかし手入れは悪く、樹木に覆われ、草もボウボウである。立派な富士塚なのだから、もう少し手入れをしたらどうだろうか。諏訪神社、板橋区教育委員会に申し入れたいものだ。

下赤塚富士というのだそうだが、近くの上赤塚富士と紛らわしい。大門富士とか、諏訪富士、大宮バイパス富士とか、もっと工夫した名前にして欲しい。

上赤塚富士、赤い鳥居のわきにある富士塚 石碑も多い。

■板橋区立美術館、郷土資料館

新大宮バイパスを越えて、再び谷間において区立美術館、郷土資料館のまわりを回っていく。上にある大きな森は赤塚城址で、北条氏側のお城だったので、江戸幕府になってからは廃城になったので、城跡といっても何も残っていない。私は昔ここで生徒と一緒に天体観測をやった場所だ。

このあたりは台地と谷が入り組んでいる。谷奥を鎌倉では谷戸というがこのあたりでは谷津という。台地と谷の境の崖面からは湧き水が出ていた。最近ほとんど出ていない。都市化によって地下の水脈が変化したのだ。今どのくらい湧き水が出ているか記録しておこう。

■氷川神社（板橋区赤塚 4-22-1 ）

郷土資料館の池の脇から急な坂を上っていくと氷川神社がある。赤い鳥居には氷川神社・御霊神社となっている。鳥居の前には長い参道があり、往時のにぎわいを感じさせる。

参道前には三遊亭円朝の怪談話「乳房榎」のケヤキの木がある。この話は松月院が舞台で、そちらにも「乳房榎」がある。

板橋区、練馬区あたりには氷川神社は多い。このあたりから氷川神社の本宮であるさいたま市の大宮に近いので、地元の神様として勧請したものだろう。



■上赤塚富士（板橋区赤塚 4-22-1）

この赤い鳥居の左手にお富士山がある。高さは 2.5mほどで、下赤塚のものよりも小さいが下赤塚富士と違って、熔岩などがはり付けられており、富士山らしい姿をしている。富士講の石碑も多く、丸吉講、丸瀧講などで造ったものである。



お富士山の鳥居には浅間神社の名前がある。石碑には北口本宮と書いてあるのも珍しい。富士浅間神社は静岡県側の富士宮の本宮、山梨県側の富士吉田の北口本宮があるが、関東の富士講はほとんど北口本宮に詣ってから、登山をした。

登山三十三回と書いてある碑もある。その脇にはお中道修行、内八海修行と書いてあるが、それはどんな修行をしたのだろう。お中道は富士山の中腹を巡る道で、この富士山にも造られている。八海は忍野八海のことだろう。

白子富士、川越街道沿いの熊野神社にある大きな富士さん

■ 白子川

氷川神社からは乳房榎脇から坂を下り上りして菅原神社の切りとおしを下り、白子川の遊歩道に出る。東上線をくぐり、白子橋をわたる。橋の欄干に「くつが鳴る」の歌碑が書かれている。地元に住んだ清水かつら（1898 年～1951 年）の童謡である。彼の作品は他に「叱られて」「みどりのそよ風」など多数あり、地元では童謡祭も開かれているという。

白子川にかかる川越街道の橋は東埼玉橋という。このあたりでは、この川が東京都と埼玉県との境になる。次の熊野神社は埼玉県であるが、成増からの方が近いので、私は東京の富士塚の仲間に入れている。

■ 和光熊野神社（和光市白子 2-15-47）

白子というのは奈良時代に渡来新羅人のために新設された武蔵国新羅郷（しんらごう）が、転訛したとされている。白子の鎮守はもともとは氷川神社であった。氷川は出雲の簸川から出た名前だから、新羅系の人の神社としては納得できる。しかし徐々に百済系の大和の勢力が大きくなると氷川社は衰微し、熊野神社の力が大きくなった。

■ 白子富士

熊野神社の鳥居をくぐるとすぐ右手にすばらしい富士塚が見える。高さは 10m ほどあり、都内の第一級のものと比較しても遜色ない。ただしこちらは富士の熔岩積みではなく、赤土盛りでツツジ山のようにになっている。傾斜は急で登りにくいが、頂上からの見晴らしはよい。頂上にベンチはあるが、祠はなく、コノハナサクヤヒメが奉ってあるかどうかは不明。登山口はいくつかあり、お中道もある。ツツジ、サツキの頃は花見の人出賑わう。

富士講の石碑は登山口にいくつかあり、丸瀧講の方々がこの富士塚を作ったことが分かる。大きな塚の割には石碑は少ない。この塚は白子川につきだした台地の尾根の末端を整形して作ったものであることは、背後に回ってみるとよく分かる。



■胎内巡り、洞窟巡り

境内左手の高台にある不動院の前から洞窟にはいることができる。富士塚には「おあな」と呼ばれる洞窟が付き物なのだが、こちらは離れたところに、長い洞窟がつけられている。

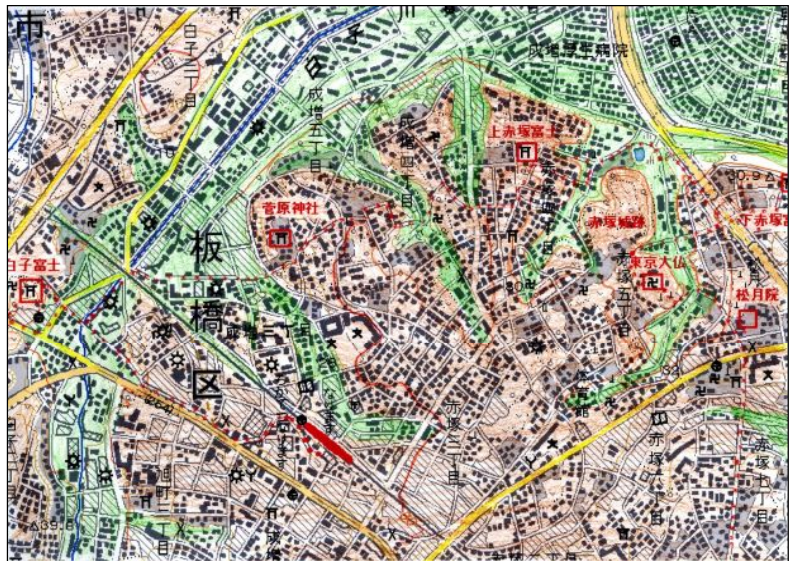
こちらはすべて富士の熔岩でできている。都内にあるお富士山は熔岩で固められているものがほとんどだが、東京近郊の大きな富士山は土盛りが多い。きっと内陸まで石を運ぶのが大変だったのだろうと思っていたら、ここでは熔岩はもっぱら胎内巡りの洞くつ造りに使われている。中に何体かの石仏があり、ろうソクが灯されており、夏でもひんやりとしている。



■白子宿 大阪

熊野神社の背後の高台は武蔵野台地であり畑が広がっていたが、今はマンションだらけ。台地と白子川の低地の境の崖には豊富な湧き水があった。昔はこの地の坂を「瀧の坂」と言ったそうだ。現在も水量は少なくなったが湧きだしている。この瀧を修行の場ににしたのが神瀧山清龍寺不動院である。

富士塚には「丸瀧講」の碑がたくさんあったので、この不動の瀧から名付けたものではなかった。残念ながらこのオリジナルではなかった。



この富士山も赤塚氷川、諏訪神社の富士も台地の上に造られている。上の図は地形図に色づけをしたものだが、谷戸が入り込んでいることがよくわかる。

今は周りに高い建物があるので、景色はよくないが、往時はこれらの富士山の上からはるか彼方の本物の富士山もよく見えただろうし、荒川の向こうには筑波や日光の山々が見えたのだろう。富士さんはただの高い場所というだけでなく、富士を遙拝する場所だったのだろう。

■次回は富士さん最終回 ■ 3月6日（木） 富士吉田の富士北口浅間神社、甲斐一宮の浅間（あさま）神社参詣。

■ 4月からは月一回不定期に榎町地域センターで「みわ塾」を開催します。